

朝鮮陸橋に就て (トラウツ)

「朝鮮併合さる」(千九百十年八月二十二日)と新聞は簡單に報導した。是によつて日本は永年細心の準備を遂げてポーツマス條約の最後の一步を完全に踐んだのである。最後の一步と言つても之は講和條約に於て別に何等の言葉を以て言ひ交はされたものではない。而かも之によつて日本は殆んど本州と同面積の版圖の擴張と、千三四百萬の人口の増加とを爲し遂げた譯である。

領土の擴張が如何なる種類のものであるか。日韓併合が兩者にとつて如何なる政治地理學的意義を齎すか。以來日本はこの事實によつて如何なることを爲したかと言ふことを考へて見る。

朝鮮は歐亞大陸の東岸に位する半島である。その中部北部は緯度の上から見て比較的南方に位置してゐるにも拘らず、嚴冬と盛夏は餘程滿洲に似た所がある。山脈は半島を縦走して東寄

りに分水嶺を形成してゐる。河流は殆ど西及び西南海岸に注ぎ、この方面に平野が開けて潮汐の影響によつてかなり上流まで溯航の便がある之に反して東岸は嶮峻にして内陸水運は發達しない。鎮南浦から元山を劃する線は大體に於て南北朝鮮の境界とすることが出来る。

朝鮮は南方對馬水道によつて一部離れてはゐるけれども、全體として實に日本と大陸との間に横はる一の陸橋 Land Bridge (Landbrücke) を形成するものである。この陸橋たるや、海峡と朝鮮とを領すれば大陸支那の首府に達することは極めて容易である。この脅威を興ふることによつて外交上の目的は既に充分達せられるのである。二十七八年の役は明かに此の事實を物語るものである。

朝鮮半島の政治地理學的意義に關して考ふべき事は、先づ境界の種類、住民、國家的環境、

文化の歴史的交通路及び進展路（屢々戦時の進軍路と一致する）最後に外交的成果即ち國家又は國民の發展力である。

「政治地理學は歴史の示す結果に憑據するもので、政治地理學が作り得る法則は大部が歴史と一致するものである。自然的條件についての知識は政治地理學的現象を説明するために充分なものではない」

朝鮮半島の境界は殆ど全部が最も有利な海岸線によつて出来てゐる。只北方のみは陸の境界で侵入を受ける可能性がある。鴨綠江と豆滿江は通路であつて境界とはならない。長白山脈は北方に於ける唯一の障壁である。鴨綠江は十七世紀の頃から千八百九十五年まではその北岸に中立荒蕪地帯があつたために實際の境界をなしてゐた。豆滿江は長さに於て鴨綠江の五分の二位で境界としては鴨綠江と略同様の作用をして居つたけれども、この河は上流に森林の繁茂してゐる點以外は鴨綠江と餘程趣を異にしてゐる屈曲の多い事と冬季長く結氷する事とは航路と

しての價值を非常に減するものである。

「陸橋」なるものは、之がその兩端から文化的及び軍事的交通に盛に使用される場合に於てのみ重要な意義を有するものである。換言すれば此橋によつて結びつけられた二つの地方、二つの大陸又は國家が精神的又は物質的に交通する場合に於て重要なものである。かくの如き陸橋それ自身が若し民族的、文化的又は政治的に獨立のものであるならば、力の關係によつてある時は一方の又ある時は他の一方の隣國に好意を寄するに至るものである。陸橋が若し内股膏藥的政策を棄てるならば、彼は容易に文化的にも政治的にも虎視眈々たる兩隣國から獨立し得るものである。かゝる半島が若し民族的に、地理的に又は國家的に分離した部分からなつてゐるならば、全體としては外敵に對する防禦上有利な境界を有してゐるにも拘らず攻撃力を有せざる限りは不利の状態に陥るのである。朝鮮の過去の歴史は屢々この事實を物語つてゐる。ソツタルの言へる「二強國の間に介在するがために

二重の貢賦の義務を有する地」となるのである。國家の發展、國の財政、交通等の發展は國家としての獨立の存在といふことに廣大な關係を有するものである。此の事は又朝鮮に於て積極的、消極的兩方面に於て觀察することが出来る。而して之は國境が開放された北部、即ち半島本來の部と、袋狀に鎖された南部とに於て互に相違した點のあることを認める事が出来る。

朝鮮は交通の發達しなかつた時代には、その北部に於ては全く大陸そのものと同様であり、南部に於ては全然島と同様であつた。前者は非常に大陸に影響され後者は著しく島國的、保守的、獨立的である。京城附近は勿論、北東部や南部に於ても種族及び言語に著しい混合が行はれてゐるとは言へ、尙ほ今日全體を通じて之等が一樣であると言ふことは出来ない。北方に於ては滿洲系の農民が多く、南方に於ては漁民が多い。さあれ全體としては體質的にも精神的にも一の特別の型を形成してをてその面目を失はない點がある。朝鮮人は古來非常な肉食家で、

體格は大きく、體力が強い、動作はかなり粗野の方である。

精神的の點に於ては朝鮮人は頗る支那の影響を受けてゐる。文字言語宗教及び生活狀態に於ても支那の影響は少くない。而るに現今人口千七百萬の朝鮮人が彼等固有の言語文學、固有の宗教的信念風習儀式及び自主的精神を有する事は偏に島國的條件の然らしむる所である。この點は朝鮮研究者をして常に驚嘆せしむる處のものである。

近年日本の所有によつて朝鮮陸橋の利用が永久に以前と反對の方向に向けられることゝなつた。日本は開國に次で急激の發展をなし、二十七八年及び三十七八年の役に於て、支那及びロシアが日本を窺ふために朝鮮陸橋を得んとする野心を完全に撃退した。かくて強國となつた島帝國は自國を大陸に橋渡しする處の陸橋を第三者の手にも、無力な朝鮮自身の手にも委ねず自らの手に收めたのである。日本の將來は實に朝鮮にかゝつてゐると言つてもよい。

朝鮮の併合によつて日本は大陸強國としての重要な第一歩を踏み出した。かくて日本は半島を植民地として利用し更に北西に向ふ進路としたのである。事實は單に朝鮮が獨立を失つたといふ事に止らないのである。朝鮮は大日本帝國の縁邊に於て、支那及びシベリアに對する緩衝地又は進軍地としての任務を帯びるに至つた。之は少くとも日本從來の名譽の孤立と反對の事實を物語るものである。朝鮮は又滿洲と共に日本が更に附近の地を分割すべき第二の海軍根據地としての任務を引受けねばならぬ。

朝鮮を得て日本は何をしたか。先づ南滿洲を見よ。鴨綠江の河口から遼河の河口に至る間の海岸には遼東の山地があり大連の半島があり旅順の港がある。旅順は北京の外港天津に至る百基米の水路を隔て、山東に對し、かくて旅順及びその背面の地は黃海に於ける海戰上、及び朝鮮より鴨綠江を経て旅順、更に奉天北京に進む陸戰上の戰略に大なる意義を有する。

今まで殆ど世界の注意を牽かなかつた此地方

朝鮮陸橋に就て(トラウツ)

が、かくて初めて千八百九十二年以來、第一流の政治的(軍事的)舞臺として重要な意義を有するに至つた。當時日清戰爭は表面的には朝鮮の獨立(支那よりの)のために行はれ、海陸共に無力な表面的の國家たるこの陸橋は直ちに日本の海上權に委せられた。日本は鴨綠江に進み茲に支那の艦隊を破り不意に旅順の要塞を占領した支那の戰鬪力の弱いことは卒然として人を驚愕させた。

千八百九十五年下關條約に當つて日本が、就中露佛二國の抗議に遭つて大陸に領地を有するの地歩を失はざるを得なかつた事は人の知る所である。ロシアは千八百九十八年旅順と共に關東半島を租借し茲に確固たる地歩を占め、多年熱望した不凍港を得。南滿に勢力を振ふを得るに至つた。千九百年北清の事變が起り之が鎮定に於て日本は充分歐洲列強の軍隊を學ぶ事を得た。

かゝる間に日本に於ては盛に新聞や學校教育が旅順を奪回された事は祖國の名譽を傷けるも

のであることを高唱した。講和會議は朝鮮に於ける日本の利權を認めなければ、鴨綠江上流の森林と北西朝鮮の金産は永年ロシアの垂涎して措かなかつた所のものである。彼の膨脹力は旅順を獲得した事によつて決して満足せず、その力は正にこの方向に向けられたのである。陸橋の北端に於て日露の利權衝突は益々烈しくなつた。島國に特有な執拗を以て日本は朝鮮に於て益々確固たる地歩を占め、歩一步日本の政策はこの目的に努力した。終に事態は逼迫した。ロシアの行動に慍焉たる日本は茲に再び朝鮮獨立のため（此度はロシアよりの）斷乎として武器をとつて立つ事となつた。

かくて間もなく海上權は再び日本に屬し、朝鮮陸橋は日本の有に歸した。

千九百五年ポーツマス講和會議に於て、日本は彼の努力と犠牲の結果として、奉天に至るまでの南滿洲を絶對利權範圍となし、旅順長春間の南滿鐵道を得、大連及び旅順を含める關東州の租借權を得た。ロシアは朝鮮陸橋の北端から

十分遠く追ひ還へされた。日本は附近の海上權を有する限り永久に陸橋の支配者である。陸橋の北西端、鴨綠江、豆滿江の北側に於ては南滿鐵道の所有によつて經濟的にも軍事的にも更に一種の緩衝地帯が出来た譯である。

日本に對する朝鮮の意義は近年に至るも依然として變りはない。日露戰爭が日本をして東亞開明の先驅たらしめたとすれば支那の共和制の失敗は日本の發達を促進せしめたものであり、世界戰爭は日本を完成せしめたものである。その後如何なる反動が起つたか、殊に西洋の社會主義、共產主義の影響が如何に現はれたかに就ては尙ほ豫知を許さぬものがある。昨年九月の恐るべき震災は日本人の有する健全なる力強い性質を躍動させた事は確かであるが國家財政の上に受けた痛手は少からぬものがある。二十年前の雄々しき努力によつて得た所のものを確實に保持して行く事は此島國にとつて容易な業ではあるまい。加ふるに北米合衆國に於ける此國の移民問題は暗雲低迷の状態にある。

元來が純島國であつて異常の粘着力と政策的自由とを有する日本の孤立と、純大陸國たる獨乙の政策的孤立とは、に相似た所がある。朝鮮の獨立運動が遽かに顯著となつたとするも決して重大な意味を有するものとは考へられない。日本の政策は吾々の知る範圍では朝鮮に於ける多少困難な問題を着々巧妙に處理しつゝあるものである。

以上抄譯した論旨は日本と支那との中間に在る朝鮮の地政策的意義を明にして頗る簡截にして要領を得てゐる。唯一ヶ處三國干涉の時の獨逸だけを抜いて「就中露佛の」としたのは日本人から見れば詭辯であつて、世界戦争開始前後の一般の獨逸人が日本の日英同盟と日露協同とで獨逸に開戦したのを解し能はぬ心理状態に陥れた續きとしか思はれぬ。之を國惡を諱むは禮なりといへばそれまでにはあるが、戦争終結の機を失して收拾し難き困憊を招いた原因が一部は歴史家の曲筆が禍したとすれば、此の如き點は他山の石とせねばなる

朝鮮陸橋に就て(トラウツ)

まゐ。(春本篤夫抄譯)

(Trautz: Die Landdrücke von Korea.
Zts. f. Geopolitik, 8 ff, 1924.)

上總西南海岸段丘の介層

君津郡大貫・八幡・笹毛・湊等の海岸には五米乃至十米、稀に二、三米の地に洪積世礫層又は新三紀層を不整合に被覆する泥土層ありて、多くの現世介を含有す、次の數種は其の特に多きものなり。

Ostrea denselamellosa, *Ostrea gigas*,
Dosinia japonica, *Alcinoma iniquinata*,
Cyclina chinensis, *Columbella dunkeri*,
Dentalium octogonum, *Nassa livescens*.

余が採集せし辨鰓類・腹足類七十餘種は主として *Estuary* のものに屬し、外に珊瑚・海膽各一種あり。矢部教授の記述されたる大東崎介層と類似的點多く、上總海岸が最近世に於て約十米内外の隆起せるを示すものなるべし。(T.U.)